

【史料紹介】新出の本願寺「御印書」(教如期)について

安 藤 弥

ここに紹介する史料は、年不詳三月九日付で粟津勝兵衛村昌が奉者となって発給された本願寺のいわゆる「御印書」である(筆者所蔵)。原型は折紙形式であったが、現状は掛軸装にされている。表装の際に、折紙の折目を切断して、下部を上下回転させて付け直している。原紙の法量(寸法)は縦一七・七cm(二段)、横五二・四cmである。粟津勝兵衛村昌(生没年不詳)は東本願寺を開いた教如(一五五八―一六一四)の家臣とされるため、この「御印書」は教如の意を奉じて出されたものと見られる。新出の教如関係史料として紹介することにした。

まず、「御印書」とは、戦国期から近世初期にかけて本願寺教団において用いられた文書の一種である。文書の袖(冒頭部分)に捺印(本文書の場合、黒印で「詳定」)があり、真の発給(差出)者である本願寺住職(本文書の場合は教如)の意思を受け、それを伝えるために奉者(本願寺家臣。本文書の場合、粟津勝兵衛村昌)が目下署判してあてどころ(本文書の場合は「宗円」等十八名)に発給するものである。この書式は戦国大名等が用いた印判状・印判奉書に似ていることが指摘され、すでにいくつかの優れた先行研究が存在する。⁽¹⁾

しかし、その中で大喜直彦氏も指摘したように本願寺「御印書」研究は端緒にすぎたばかりで研究すべき点が多分にある。たとえば、大喜氏は「御印書」の歴史的変遷とその性格の変化を明らかにしようとする古文書学的考察を提示したが、「御印書」の教団内における文書的機能、印判状・印判奉書としての史料的研究など、さらに論ずべき点は多い。何よりも、「御印書」史料はまだ十分に収集・公表されていないのであり、全体像の把握を進めていかねばならない研究段階である。この史料紹介もそうした研究の一過程に位置づけられる。

次に、本文書自体に関して言えば、繰り返すように本願寺教如の意を奉じて粟津勝兵衛村昌が出したものであり、あてどころは宗円等十八名である。その内容は本願寺教如の「直参」門徒身分にとりたてるといえるもので、これはとくに注目すべきことである。

東本願寺を開いた教如の生涯について、ここではたどらないが、文禄元（一五九二）年に本願寺継職、翌年に退隠後、さまざまな経緯を経て慶長四（一五九九）年ころにはあらためて自らの本願寺を存立させていた。そして、慶長七（一六〇二）年に徳川家康から烏丸七条に寺地の寄進を受け、慶長八（一六〇三）年に関東上野猿橋妙安寺から親鸞木像（御真影）を譲り受け、同年に烏丸七条に移り阿弥陀堂を新造、翌慶長九（一六〇四）年に御影堂を新造し、「東本願寺」を創立する。その教団編成については、すでに天正八（一五八〇）年、石山合戦終結後の流浪（秘回）期に教如派家臣団・門徒集団の存在がうかがえていたが、慶長年間以降に本格的な進展を見たものと考えられる。その実態にはまだ不明な点が多く、本格的検討・解明が今後の課題であるが、本文書も慶長年間における東本願寺教団編成の中に位置づけられるものと考えられる。³

奉者である粟津勝兵衛村昌についても、その名は研究史の中では知られているものの、実態はよくわからない。『真宗人名辞典』⁴によれば、生没年不詳で伊賀定清の子とされる。「東本願寺十二世教如の側近で、親鸞真影を東本願寺に安置するため、関東へ使者として迎えに行った。一六〇二年移徙御供の役を勤め、申物取次を行なう奏者役に就任。後に寺内の町支配になった」と記されている。本願寺家臣と言えば、中世には下間氏の存在がよく知られているが、蓮如以降の本願寺教団形成の中で次第に多くの家臣名が諸史料に登場してくるようになる。『宇野主水日記』を執筆した宇野主水などもよく知られている。そして、本願寺の東西分派にあたって下間諸家が分裂するとともに東本願寺では粟津家が台頭すると言われる。その粟津家の台頭初期に勝兵衛村昌の活動が見られるのである。

さて、本文書の内容であるが、読み下しと内容は次の通りである。

〔読み下し〕

連々の馳走に依り、向後、各、直参に召し上げられ候、有り難く存せられ、いよいよ馳走申さるべき事、肝要に候、そのため、御印を排され候ものなり、

〔内容〕

繰り返しの馳走（この場合、教如を支持し、その活動を支援すること）により、今後は各（宗円等十八名）を本願寺（教如）の直参門徒とします。ありがたく思っていただき、いっそうの馳走をしていただくことが肝要です。このため御印を並べる（この場合、直参取立について押印をもって証明する）ものです。

【史料紹介】新出の本願寺「御印書」（教如期）について

本願寺教如が、「馳走」(支持・支援)してくれた門徒集団に対して「直参」(取次坊主を介さず直接、本願寺に参ることが出来る教団内身分)に取り立てるといふ内容で、石山合戦終結から東本願寺に創立に至る教如とその教団の動向において、こうした内容は確実にありえると思われるが、実際にそれを示す文書が初めて見出されたことになる。

教如派の坊主衆・家臣団・門徒集団についてはもちろんこれまでも研究がなされている。しかし、門徒集団については畿内・北陸・東海各地域のまとまった動きを捉えることはある程度できているものの、本文書のあてどころに記されているような在地レベルの門徒の実態を確実に知ることのできる史料は少なく、この意味でも本文書は貴重な史料である。ただ惜しむらくは地域が示されていないため、どこの門徒集団なのかをただちに確認することができない。とはいえ、逆に言えば地域を記さず十八人に及ぶ在地門徒の名を列記して「御印書」が出されるといふこと自体、こうした門徒集団と直結していく本願寺教如のすがたを考える際、重要である。また、法名を持つ者と俗名の者が並列で示される十八人のありようも、教如を⑤実際に支えた門徒集団のすがた、僧侶・俗人未分化という当時の門徒集団の実態状況などを考える上で、非常に興味深い。

以上、いくつかの問題提起・展望も含みながら、本文書の紹介のため、若干のことから記してきた。本文書単独の史的価値については議論もあろうが、今後も関係史料の発見・公表を重ねて全体像の把握につとめていくことが、研究の基礎作業として重要であり、継続的に取り組んでいきたいと考えている。

【史料】本願寺御印書（粟津勝兵衛村昌奉）



〔翻刻〕

<p>御印候者也 粟津勝兵衛 三月九日 村昌（花押）</p>	<p>（黒印「詳定」） 連々依馳走 向後、各直参 被召上候、有難 被存、弥馳走 可被申事、肝 要候、為其、被排</p>
<p>宗円 了二 道清 行恩 源介 道可 咄斎 唯観 七郎兵衛 総右衛門 五郎兵衛 甚右衛門 新介 宗右衛門 善兵へ 又右衛門 源左衛門 善右衛門</p>	<p></p>

【史料紹介】新出の本願寺「御印書」（教如期）について

註

- (1) 草野顕之「本願寺教団における印判奉書の意味」(『仏教史学研究』二五―二六、一九八三年)、泊清尚「本願寺懇志請取状の基礎的考察」(『仏教史学研究』二七―二八、一九八四年)、大喜直彦「本願寺教団文書の推移について―「御印書」と法名状を通して―」(『本願寺教団の展開』永田文昌堂、一九九五年)など。
- (2) 本願寺教如の生涯については、同朋大学仏教文化研究所編『教如と東西本願寺』(法藏館、二〇一三年)などを参照。とくに教如の家臣団については同書所収の太田光俊「教如とその家臣団―御家中衆座列関連史料の紹介―」を参照。
- (3) 本文書の日付が「三月九日」であり、石山合戦終結期の大坂「拘様」関係文書と同日付でもあることも考えてはみたが、現在おおよそ想定される粟津勝兵衛村昌の活動時期を考え、ここでは慶長年間と推定しておくものである。
- (4) 『真宗人名辞典』(法藏館、一九九九年)。東本願寺の家臣については『東本願寺家臣団名簿』(『真宗大谷派』宗学院編集部編、一九三八年)を参考にするのが現在でも基本ではある。
- (5) 本文書が喪失せず、軸装で伝来したこと自体、おそらくは宗円等十八名を祖先とする門徒集団が教如直参門徒としてのアイデンティティーを保持し続け、本文書がそのことを示す大切なものであったことを示している(とともに本文書の流出はそのアイデンティティーの喪失を暗示していることになろう)。こうした歴史的世界への注目も重要な視点であると考ええる。